

## 民衆の教育経験

18 世紀後期—20 世紀前期イギリス労働者の自叙伝を読む (2)

小 野 征 夫

### はじめに

本稿は、イギリス労働者の自叙伝を史料とする研究の第二報告である。近代学校教育制度の形成期を生きた人々は、学校という特別の教育機関との間にどのような関係を結ぶことになったのか。学校での「教育」を経験することは、その人の人生全体のなかでどのような位置を占め、どのような意味をもつものであったのか。当時の学校教育像をそこで学んだ子どもとその家族の側から照射するとともに、民衆にとっての教育経験の意味を検討したいと考える。

イギリスにおける初等教育制度・義務教育制度の成立は 19 世紀後半のことである。しかし、民衆対象の学校形態による教育はこの制度の成立によって開始されたのではなく、それに先立つかなり長い歴史をもっている。その組織だった取り組みは、読み書きの初歩の教育とともにキリスト教信仰を普及することを目的とする慈善学校運動にはじまる。16 世紀後半の非古典・無償学校設立の動きを先駆とし、17 世紀末 (1698 年) のキリスト教知識普及協会の設立は慈善学校運動の広がりを反映したものであるとともに、その全国的普及の契機となった。1754 年に、慈善学校の学校数は 2044 に達し、生徒数は 5 万 1000 人を超えていた<sup>(1)</sup>。次いで登場

するのは日曜学校運動であり、18世紀半ば以降、各地に広がりを見せるようになる。とくに、1785年の「大ブリテン全土に日曜学校を設けるための協会」の結成、1803年の日曜学校連合の結成によって、日曜学校の開設は全国的な運動として展開されていく。日曜学校が文字通り日曜日に、教会を教室として、宗教行事とも関連づけられながら実施されたのに対して、19世紀初頭には、同じく教会・宗派団体によって、週日に開かれる基礎教育学校設置の動きが本格化する。国教会系の国民協会と非国教会系の内外学校協会による学校設立がそれであって、その動きは全国に波及する。これらの学校は宗教団体によって設立されたものではあるが、1833年教育法によって国庫補助を受け、公営学校として位置づけられることになる。18世紀後半から19世紀にかけて、これらの学校と並んで民衆教育に大きな役割を果たしたのは、私営普通学校 (common private school) や、おばさん学校 (dame school) と呼ばれる私営の学校であり、全国の町や村、至る所に数多く開設されていた。1870年初等教育法の成立は、この乱立状況の私営学校を一掃し、制度的整序を図るものであった。法は宗派団体系の公営学校を存続させるとともに、それらの学校のないところに地方教育委員会 (school board) を設置し、教育委員会立小学校 (board school) を開設することを定めた。そして1876年法による義務教育化、1880年法による就学強制措置の採用、1891年法による無償化の措置を経て、初等教育の普及は大きく進展することになる。これが、民衆を対象とする初等教育制度成立史のアウトラインである。

それでは、これらの学校は、民衆の前にどのような姿をとって現れていたのか。民衆はこれらの学校とどのように向き合い、自らの子育てにおいて、それをどのように利用してきたのだろうか。以下、自叙伝を基本史料としつつそれらの事実に接近することにしよう。

## I 学校教育を経験するということ

### (1) 貧弱な教育と肯定的評価の大きさと

「私の教養には二つの源泉がある。老ベティ先生の学校と日曜学校とがそれである。前者からの直接の湧出はまもなく途絶えることになるが、それらはいずれも、たとえ間接的にではあっても、途切れることなく最近に至るまで、ナイルが沃野を育てたように、私の生涯にわたって実りの水を供給し続けた<sup>(2)</sup>。」

1832年スタンフォードシャーで生まれたチャールズ・ショウは、学校で学んだことによって自分が手に入れたものの大きさをこのように表現している。それでは、彼の受けた教育の実際はどのようなものだったのだろうか。

彼が通ったベティという老婦人の経営する学校は、小さな自宅の一階唯一の4ヤード四方の部屋と、上階の寝室に通ずる階段を教室にしたものであった。しかも、その部屋には小さいテーブル一つと椅子二脚、木製の長椅子が2、3あるだけで、壁には数枚の絵が掛けてあった。ベティ先生の教育は単純なものであったが、その学校の生徒たちは幼いうちから読む能力に優れていたという。まずアルファベットが教えられる。それは素朴な絵とともに示されるのだが、その印象は後年に至るまではっきり記憶されている。この入門時の教育に読みの力を育てることに成功した彼女の教育の秘訣があったのだろう。その後『リーディング・メイド・イージー』というやさしい読本を学び、次に綴り、次いで聖書の読みへと進む。成績優秀者には螺旋階段の一番上に座ることができることなどの特典があった。また聖書の読みに成功した生徒には、靴下の編み方が教えられた。先生は機械に負けぬ上手な編み手だった。ここでは書き方（ライティング）は教えられなかったので、生徒は「読み書き」ならぬ「読み編み」を習った。ショウがこのおばさん学校に通ったのは、7歳で陶磁器工場の型運びとし

て働き始めるまでの4年弱の期間だったという<sup>(3)</sup>。

ショウはおばさん学校に通学するのと並行して、日曜学校にも通っている。その開始はいつのことかはわからないが、前者よりもかなり後になってからのようである。ただ、6歳になる前に聖書クラスに編入され、年長の子よりも早く聖書を読まされていたことを誇らしげに語っている。ほめられて特別に聖書をもらった記憶もある。日曜学校では、午後にスペリング・クラスがあった。ここでも、ベティ先生の授業を受けていたおかげで、難なく前に進むことができたという。日曜学校での学習は、7歳で働き始めてから後も数年間続いている。「日曜日は砂漠のなかのオアシス」のようだったという。毎朝5-6時の間に、時にはそれより早く出勤し、夜8-9時まで働く毎日であったにもかかわらず、日曜朝9時には教会に行く仕度できていた。姉に手伝ってもらいながら、髪を良い匂いのする油で整え、洗濯をした服を身に着けた。日曜日には彼の生活の中に、唯一つの心地よさ (sweetness) がもたらされた。日曜学校は、無秩序と放縦とが支配していた職場環境による反道徳的影響から、彼を救い出す機会になったのだという<sup>(4)</sup>。

これがショウの享受した「教育」のすべてである。冒頭の発言は、自己の受けた教育が極めて限定的・初歩的なものであったにもかかわらず、そこで獲得した読みの能力がその後の読書生活を可能にし、自らの教養形成を支え続けたということであろう。後に彼は、メソヂスト教関係教会の説教師やラディカル派新聞の記者など、多方面で活躍することになる。

ショウが述べているのと同様に、自分の教養として働く自己内部に形成されたものを、ジョセフ・アーチは「堅固な知識の構築物」と呼んでいる。アーチは、1826年、ウォーリックシャーの農業労働者の4人の子供の次男として生まれている。農業労働者として各種の仕事に従事するとともに、40代になって農業労働組合の役員になり、州議員、国会議員を経験する人物である。彼の場合、学校に通ったのは6歳から9歳になる前までの3年間にすぎない。しかし、適切に配慮された教育のおかげで、「私は安全

確実に、そして次第しだいにその上に、小さくともしっかりした知識の構築物を組み立てることができた」と述べている<sup>(5)</sup>。

アーチが通学したのは、彼の住む村に唯一の、教区学校だった。その学校との出会いは、彼にとって「幸運なこと」だったという。それは、学校を離ればすぐに、自分たちの生活の糧を稼がなければならないことになる「生徒たちの真の利益に心を砕い」てくれる人が校長だったからである。校長は、「教義問答や他の不要な教育的がらくた物で時間を浪費することを拒否し」、読み、書き、綴り、計算に加え、測量の知識まで教えてくれた。この3年間の経験は、その後継続された独学の基礎となった。「労働者の子どもの暗い運命が私の上に襲いかかるとしても、私は自分の能力に無知の黒雲を定住させはしなかった。私は獲得した知識を保持するだけでなく、そこに多くのものをつけ加えはじめた。私は本を買い、懸命に勉強し、自分自身を教育した。」そして「当時すばらしい学識と考えられていたものを少しずつ拾い集めることをやり通した」という。この独学の力を育ててくれた校長に対して、彼は「その人は貧しい少年が会うことを望む優れた教師の一人だった。私は彼のおかげを被っていることを決して忘れない」と感謝の言葉を述べている<sup>(6)</sup>。このアーチの独学は母親によっても支えられているが、その家庭教育については後に取り上げることにしよう。

さて、前述のように、チャールズ・ショウが通った学校は「おばさん学校」であり、ジョセフ・アーチの通学した学校は「教区学校」である。これらの学校は民衆の子弟を対象として読み、書きの基礎をはじめ初歩的な教育を施すものであり、施設・設備の面でも、教育内容の面でも貧弱なものが多かった。しかも、労働者家庭の子どもは、これらの学校に就学したとしてもそれは短期間であり、教育経験としても貧弱であったといわざるをえない。しかし、それにもかかわらず、自叙伝作者の多くは、ショウやアーチの場合と同様に、自己の就学経験についての記述に少なからぬ紙幅を充てているだけでなく、その経験に肯定的な評価を与えているのである。

したがって、民衆の教育経験の意味を問うためには、民衆教育学校の実態への接近が不可欠の作業になるだろう。そこでまず、民衆教育学校の概要を整理することから始めよう。

18世紀後半から19世紀前半にかけての期間は、民衆教育学校の発展期といってよいだろう。とくに19世紀に入ると、いわゆるベル＝ランカスター方式に基づく学校づくりが進展し、多人数の生徒に対する一斉教授が可能になる。アンドリュウ・ベルによる「国教会原理に基づく貧民教育のための国民協会（国民協会）」（国教会系）とジョセフ・ランカスターによる「内外学校協会」（非国教会系）が結成（それぞれ1811年と1814年）され、宗派間の勢力分布と布教対立を背景としつつ、それぞれの学校建設が競争的に展開されていく。これらの学校は、宗派団体によって設立されたものであるが、宗教的帰属にかかわりなく地域の人びとに開かれた、営利目的ではない学校として公共的性格をもつものであった。1833年に成立した学校建設費（のちに経常経費）を補助する国庫助成制度は、学校開設の動きに拍車をかけるとともに、助成対象となった両協会系学校に公営基礎教育学校としての性格を与えることになった。アーチが学んだ「教区学校」とは、彼の居住する地域の教会および教区組織によって支えられた国民協会系の学校のことだといいい直してもよからう。

これらの宗派団体系の学校とは異なり、個人が生計を営むために開く学校があった。おばさん学校（dame school）と週日普通学校（common day school）と称する学校がそれである。この私営学校の教育は、簡単な読み方の教育を基本的な内容としつつ、託児機能を併せ持ったり、裁縫や編み物を教えたり（特に女子対象に）するものから、読み・書き・算のいわゆるスリー・アールズ（3R's）に加え地理、歴史などの科目を教えるものまで、かなり大きなひらきがあった。ショウの通った学校が軍人だった夫に先立たれた老婦人が経営するものだったように、おばさん学校の担い手の多くは、その名の通り、寡婦や独身の女性であった。ただ一部に、怪我などの特別な事情のために他の仕事に就くことが困難な男性が経営する

ものも、おばさん学校の範疇に括られていたようである<sup>(7)</sup>。週日普通学校の場合には、おばさん学校に比べて、設備においても教育内容においても整っているものが多かった。しかし、それはあくまでも相対的なものであって、自叙伝に見るかぎり、その水準に格段の違いがあるわけではない。これらの学校の教師には、資格要件が設けられておらず、特別の教育経験をもたない人も生計を立てるための仕事として学校を開くことが可能だったのである。

これらの民衆教育学校は、公営であれ私営であれ、全般的に水準の低い教育機関であった。それは、伝統あるグラマー・スクールとの対比においてのことだけではない。民衆教育学校は、ヨーロッパ世界の文字文化を代表するラテン語の教育を軸としつつ人文的教養の教育を担い続けてきたグラマー・スクールとは、全く別種・別系統の教育機関であったことは改めていうまでもないが、民衆に母語・英語での読みと書き、および計算の基本的な力を獲得させる教育としても貧弱な態勢と内容のものであったといってもよからう。このことについて、前述のジョセフ・アーチは次のように言う。19世紀前半、自分たちの周辺の村々の教区学校の教育は、「信じられないくらい悪かった」。まるで「私の時代の村の学校の扉の上には、『正しい種類のたくさんの知識は貧しい人々にとって危険なものである』という文章が、モットーとして掲げられていた」かのようなだった。つまり、教区学校の教育内容の貧しさの理由は、「本の知識はより少な目の方が労働者の子どもにとってよりよいことであり、上位の人々にとってはより安全なことであると、権威ある人たちは信じ行動していたに違いない」からである。したがって、アーチは「このような学校には何の共感も持たない」だけでなく、「それを一掃したい」と思うとさえいう<sup>(8)</sup>。アーチはこのように当時の学校の教育を強く批判するとともに、周囲の状況がそうであったからこそ自分の経験は幸運であったとして、自らの通った学校の校長への謝辞を述べている。チャールズ・ショウの場合にも短期間の限定的な内容の教育であったにもかかわらず、その経験に強い愛着と肯定的評価を抱

いていたことは冒頭に見たとおりである。たしかに、彼らの通った学校は劣位で貧弱な教育機関であったことは間違いない。しかし、そうであるからといって、彼らがその就学によって手にしたものが誰にとっても貧相な経験であったと結論づけることは早計というべきであろう。これらの学校は、それぞれの学校ごとに、つまり、ほとんどの学校が教師一人で運営されていたのであるからどのような校長かによって、教育の内容とその達成度にかなり大きなひらきがあった。しかも、学校の条件がいかに貧弱であったとしても、そこでの学習が、少なからぬ人々にとって、知性を育てるうえでのかげがえのない契機になっていたことを見落とすべきではなかろう。したがって、本稿の意図するように、民衆の教育経験の意味を問うために、事例を重ねつつ検討することが必要な作業であることも了解されるだろう。

## (2) 民衆学校発展期における7つの事例

18世紀後半から19世紀前半の民衆教育学校の普及・発展期に子ども期を過ごした人々は、どのように学校とのかかわりをもつことになるのか。ここでは、自叙伝の中で、就学経験に関する記述に比較的多くの紙幅を費やしている7人を取り上げ、年代順に、その経験の概要をまとめることにしよう。

1771年、ロンドンに生まれたフランシス・プレイス<sup>(9)</sup>は、8歳から14歳まで二つの私営週日普通学校に通っている。彼は学校教育終了後、皮半ズボン製造職人の徒弟となり、腕のいい仕立て職人になった人物である。二人の姉妹は「リスペクタブル・デイ・スクール」と人々が呼んでいた学校へ通い、彼と弟は「残忍なジョーンズ」というあだ名の校長の経営する学校に送られる。後に、弟とともにボイス先生の小さな学校に移り、14歳まで教育を受けている。彼の場合、このような長期間の学校通学が可能になったのは、父親がパブを経営し、一般の労働者家庭に比べてかなり多くの所得をもつ層だったからであろう。そこがロンドンであったので、周囲にいくつかの学校があったようであるが、その学校が選ばれた理由、そ



れを変更した理由は何か。その説明は必ずしもはっきりしないが、次のような記述がある。当時の「ロンドンの普通の商人の子どもたちの受けた教育には、読み・書き・算を超えるものはほとんどなかった」。上の階層の人々は寄宿制学校（パブリック・スクールのことか、それに準ずるものとして数を増やしつつあった寄宿制グラマー・スクールのことかははっきりしない）へ行っていたが、「教えることはコモン・デイ・スクールと大きく異なるものではなかった」。一部に「よりよい教育をする学校もあったが、そこに入学するにはかなり高額のコストがかかった。それゆえ教育に対するそれだけの出費に価値があると考えた親はほとんどいなかった」と<sup>(10)</sup>。彼の場合にもそういうことだったのだろう。プレイスにとって最初の学校では生活上の規律に関して大きな影響を受けることはあったが、学習面ではほとんど得るものがなかった。これに比して次の学校の教育は、知識を深めるうえでも、道徳性を高めるうえでも決定的な働きをしたという。彼は自分の人生にとって、この学校の校長・ボイス先生との出会いが意味するものの大きさについて語っている。この彼の経験する教育の内容については、後に詳しく取り上げることにしよう。

サミュエル・バムフォード<sup>(11)</sup>は、1788年、マンチェスターの近くの町で手織機職人の子として生まれ、後に自身も手織工として自立する。彼は幼少期に母を失い、一時50歳くらいの保母さんの世話になったが、その後私営週日学校、教区学校、日曜学校、無料グラマー・スクールに通っている。しかし、はじめの学校では何も学べなかったという。次の教区学校も簡単な読み、書きだけを教えるものだったので、「遊びに夢中で、思考と注意力は不活発のままだった」。そこで父親によって無料で開講していたグラマー・スクール（開設主体はわからない）に送られることになる。この学校では学習の進歩を自覚する。英語の読み書きのクラスでも、聖書クラスでも首席になる。本をたくさん読むようになる。「書物との対話はわくわくする体験であった」という。しかしラテン語に取り組む上級クラスへの進級は、ラテン語を学ぶ必要を認めない父親の強い反対で実現しな

かった。彼の学校教育は、彼にとってはまったく不本意なかたちで終了することになる。

1805年、レスターで生まれたトマス・クーパー<sup>(12)</sup>は、3歳の時のおばさん学校での経験を記憶している。それはスツールに座って7歳の少年に文字を教えていたというのである。彼の場合、幼いうちから父親と一緒に物語を読んでいた。父親が音読するのを聞き、その後につづく仕方である。その結果、3歳の頃には、イソップの寓話のいくつかを暗誦すらしていたという。しかしその父親は4歳の時に死亡する。転居し、夫から染色工としての技術を引き継いだ母親の手で育てられる。大病を経験した後、5歳の時から再び別のおばさん学校と日曜学校に通う。9歳の時慈善団体・ブルーコート<sup>(13)</sup>の奨学金を得て、ベル＝ランカスター方式の新しい無料制学校に入る。学校は好きだったが、そこでの教育は聖書の読み・書きと四則計算に限られていた。11歳の時、引越しを期に、無料制学校の「単調な教育に飽きていたので」、人気のあった週日普通学校に移りたいと母の許しを乞う。学校が変わると奨学金が貰えなくなるだけでなく、逆に授業料が必要になるからである。幸運にも、その学校の校長は彼の学力を認め、アシスタントとして雇ってくれることになる。母親の収入に頼る困窮した暮らしの中にあっても、彼が15歳で徒弟奉公に入るまで継続して学習することを可能にしたものは、奨学金とアシスタントとしての処遇を得たことによるものであったとあってよかろう。

アレキサンダー・サマヴィル<sup>(13)</sup>は、1811年、スコットランドのスプリングフィールドで採石場や農場で働く労働者の11番目の子として誕生する。彼は8歳になるまで学校に入ることができなかった。その理由について次のように述べている。一つは、家で読み方を教えられていた（したがって入学を急ぐ必要はなかった）からである。父親は腕がよく、きちんとした仕事をする人として同僚たちに認められていただけでなく、数少ない「読み手」として神学から普通の読み物まで、いろいろな本を読んでいたという。次の理由は、学校が2マイルも離れており、一緒に通学したり世

話したりしてくれる子がいなかったからである。彼は石があればつまずき、水溜りでは膝まで水につかってしまうような、身体能力の劣った自立性の乏しい子どもだったという。しかし、学校に行かせてもらえなかったもっとも大きな理由は別にあった。それは、通学時に着ていく服がなかったことである。彼の父は働き者で、お酒のために40年間に40シリングも使っていないし、タバコも安息日に一服するだけだったが、暮らしは困窮していた。とくに彼が5-6歳だった1816-1817年はじゃがいもが不作で、物価が高騰し、「貧しい人々にとってつらい時代」だった。ディナーは少しのじゃがいもと塩漬にしん1-2切れを、家族6人で分けあうほどであった。この経済的事情が通学の遅れの決定的理由だろうと、彼は述べている。しかし、ここによく始まった彼の学校生活は順調に進んだわけではなかった。入学した私営学校では、他の生徒からのいじめを受け、教師との間にも深刻なトラブルを抱えることになる。この間の顛末については、後に取り上げることにする。彼は結局、この学校をやめ教区学校に移り、14歳には学校を離れ、農場、採石場その他いろいろな労働の現場で働き、後年ジャーナリストとして活躍することになる。彼は8歳で就学するが、その年から毎年夏には牛追いとして働かねばならず、自分の学校教育はわずかな知識の「生かじり」に終わるほかなかったと回想している。その頃、彼にとってその後の人生に大きな意味をもつ一つの衝撃的な出来事があった。それは、晴れた日の昼下がり、牛の番をしていた森にやってきて歴史物語を語る老人との出会いであった。その老人の語る物語を通じてはじめて歴史や地理の知識に触れ、本によって開かれる「知」の世界への関心が触発されたことを述べている<sup>(14)</sup>。

トマス・ウッド<sup>(15)</sup>は1822年、手織機職工の子としてヨークシャーに生まれる。彼がはじめに通った学校は、居間を教室にしたおばさん学校だった。一冊の大きな聖書をテキストにし、小さい子は読み、年上の子は書きの練習をした。しかし、聖書のヨハネの最初の章以外の箇所を読んだかどうかははっきりしないという。その町では郵便局長経営のものがよい学校と

されていたが、週に9ペンスの授業料が必要だったので、ほとんどの子どもたちはその学校には行けなかった。もう一つ、6歳以上で聖書が読め、牧師の推挙を得て入学が許可される寄付金立のグラマー・スクールがあった。ただし、その学校はラテン語の授業に関しては無料だが、他の教科の聴講には授業料が求められた。授業料を用意することのできないウッドは、その学校でラテン語の文法と書き方の授業だけを受ける。その通学は限定されたものであったが、祖父の次のような考えに基づくものだったという。当時、「働く人々は子どもにラテン語を学ばせるという考えを嘲り笑っていた。それがお金を要し、何らかの負担を伴うものであればなおさらのことであった。しかし、祖父は次のように考えていたのだと思う。学ぶということは、人生の実用的な目的に照らし、その質や適合性のことを、立ちどまって問うことを必要としないほど偉大なことであると。」「祖父は貧しく、文字を読めない人だったから」こそ、そのことを痛切に感じていたに違いないのだと。しかし、彼の上に見たような不十分な学校教育も8歳で終了する。しかもその「学校時代」も、4人の弟妹の世話と家で仕事する父母の糸巻きの手伝いとで、遊びの時間はもちろん勉強の時間もほとんどなかったという。彼は8歳から毛織物工場で働き、14歳で機械工の徒弟になり熟練工への歩みを開始する。

1833年、フレデリック・ホブリー<sup>(16)</sup>はオックスフォードシャーの市場町で10人兄妹の長男として生まれる。彼は3歳になるかならぬかでおばさん学校に通っていた。しかし、記憶に残っているのは、午後になると針と糸、ぼろきれが渡されたことだけだという。そこに通ったのは数ヶ月だけで、その後別のおばさん学校に移る。駄菓子販売店を兼業しており、暗い食料品貯蔵室があったので、腕白坊主は罰としてそこに閉じ込められた。あるとき自分はその中で売り物のプディングを食べてしまったことを覚えている。この学校についての思い出もそのことだけである。日曜日の散歩の際に周辺を通る時走り抜けていたことを覚えているので、きっとその学校に愛着をもっていなかったに違いないという。4歳から「ナショナルス

クール」（国民協会の学校）に通う。この学校では学習の進歩が早かったので、成績の良い者に与えられる特権（学校隣接の畑での家庭のための野菜栽培の許可、冬季の火のそばの席等々）を享受した。その後彼は選ばれてモニター（助教生）を経験し、次いで推薦を得て師範学校に進学して小学校教師への道を進むことになる。

ジョン・ウィルソン<sup>(17)</sup>は、1837年、ダラムに生まれる。4歳のとき母親と死別し、叔父に引きとられた二人の姉たちとも別れて、鉄道工夫の父親とともに各地を転々とする。父は彼が学校に行くことを望み、老婦人の経営する学校に入った。しかし彼は通学を強制されることがいやで、ずる休みをし、渡された授業料をスウィート・ショップで使ってしまった。父親のお仕置きとともに、そのことだけが思い出される。また、別の町で古いおばさん学校に通った。程度の低い教育だったのだろう、そこで何を学んだかまったく思い出せないという。ただ、彼はいたづらをしないように先生のエプロンに縛りつけられていたことを覚えている。6歳になる前に、男性教師の学校に入った。その学校では、彼は先生に指示されて、自分より年上の少年たちに新約聖書の読みを教えることをしていた。ただし自分として「いつ読みを習ったか記憶にない」。「私たちの生活歴を考えれば不思議に思われるかもしれない」が、「アヒルが水に入るのと同じように、自然に、たやすく読んでいた」と述べている。ロビンソン・クルーソーやガリバーの冒険のような児童文学も知っていたという。多分幼い時期に母親か誰か、彼の周辺に文字の読みや物語へと誘った人がいたのであろうが、そのことについての記述はない。しかし、いずれにしろ「そのようなことで、新約聖書の文字を教えることは、発音については保証のかぎりではないが、かなりうまくできたのだろう」と回想している。8歳の頃には聖書クラスの公開試験で首席をとった。賞賛の言葉とともに、粗末な服装への哀れみの言葉をもらったこと、賞として与えられた『天路歷程』をむさぼり読んだことを覚えている。11歳になったとき、父の働く石切り場の町で小柄な男性の経営する学校に通った。校長はきびしい人柄の人で、「私

の武骨さとは調和しなかった」。校長にとって「私は玉に瑕の存在」であって、「悪いことはすべて私の責任に」させられた。ある時、校長は外出するので、男女を分けるために女子の部屋に鍵をかけた。少年たちはやりすぎだと考え、鍵を開けて彼女たちを出してあげようとした。帰ってきた校長は、調べもせずに彼を首謀者と決めつけて、力の限り鞭うちをした。「それは我慢の限界を超えることだった」ので、彼はインクスタンドを校長に投げつけた。校長が正気に戻ったとき、彼はスレート（当時使用されていた筆記用具）と本と一緒に学校を追い出された。こうして、彼の学校生活は終了したという。

### (3) 小括

以上、(1) で 2 人、(2) で 7 人の就学経験の概要を紹介した。その 9 人は 1770 年代から 1830 年代までの期間に誕生している。したがって、その時期には就学義務が制度化されていたわけではない。しかし、それにもかかわらず、自叙伝に見るかぎり、家庭内での子育ての枠を超えて、子どもたちに「学校」で読み・書き等の教育を受けさせることが、すでにかなり一般的な事柄になっていたように思われる。そこでまず、民衆の子どもたちに教育を施す基礎教育学校の普及の状況を見ておこう。

前述のように、18 世紀後半から 19 世紀前半の時期は、民衆教育学校の普及・発展期であった。1851 年には、その学校数は全国（イングランドおよびウェールズ）で 4 万 6042 校を数え、3 歳から 15 歳までの年齢人口に占める就学児の割合は平均 42%（男 45%，女 38%）に達していた<sup>(18)</sup>。ただし、そこには地域差が存在している。国庫補助を受けた「公営小学校」は人口の少ない田舎町には設置されていないところが多く<sup>(19)</sup>、学校の地域的偏在は子どもの就学の事情を大きく左右する。就学率の地域的格差は同一都市内部にも広がっていた。たとえば、ニューカッスル市の統計によれば、新興中産階級、商人、職人、新たに勃興しつつあった化学、機械工業等の技師・労働者が混住していたウエストゲイトという新興地区の場合、

1851年、5-10歳児について見ると男女とも74%が学校に通学していたのに対して、アイルランド出身者の多い最貧地区であったサンドゲイト街区の就学率は男28%、女22%であったという<sup>(20)</sup>。この就学率の大きな差を説明するもっとも大きな要因は家庭経済であろう。子どもを学校に通わせることは、授業料の支払いに加え、その子の早期就労による家計補助的収入の放棄を覚悟しなければならなかったのであり、貧困層ほど子どもの就学に困難を抱えていたことは想像に難くない。したがって、前述のJ. アーチが述べているように、地方の村々の場合、貧しい労働者家庭の子どもたちは、3R'sや基礎知識の「2, 3のかけらを拾い集めるわずかのチャンス」しか手にすることはできず、あるいはそれすら与えられずに育つほかなかったのである<sup>(21)</sup>。

しかし、他方、次の事実注目しておきたい。それは、労働者の自叙伝に見るかぎり、19世紀半ばの就学率が4割強であったという統計が与える印象よりも、学校という教育機会は、かなり多くの人々にとって身近な存在であったように思われる。少なからぬ地域に複数の学校があり、少なからぬ親たちが、子どもの通学をどうするかの問題と向き合っていたのである。しかも、家庭経済の事情はもちろん、どのような学校がその土地にあるかという地域的条件等々、子どもの就学を左右する諸制約のもとでのことではあるが、人々の学校へのかかわり方はかなり主体的であったように見える。それは、とくに次の二つの面に現れている。

その一つは、自叙伝の書き手たちの多くは、前述のように、自らの就学経験がいかに貧弱なものであっても、それを肯定的に評価していることである。彼らは短期間の水準の低い教育機会しか手にしえなかったとしても、そこで獲得した読み書き能力を活用し、独学や継続的な読書によって自らの知性を開花させていく。彼らの学校教育への肯定的評価は、彼らの「知」への欲求と学ぶことへの貪欲な姿勢を反映したものと考えられる。もう一つは、少なからぬ人々が複数の学校を経験していることである。転居したとき別の学校に移ることは当然のこととしても、居住地を動かない場合に

も学校を途中で変わることがめずらしくない。この学校の変更は、親たちの意思によって、ときに子どもたちの希望に沿いながらなされる選択の結果であった。自叙伝には、その選択が何を基準になされたものなのか、立ち入った記述は少ないのだが、これらの問題を手がかりに、当時の民衆の子どもへの教育への意識のありように接近したいと考える。

ところで、人々の就学経験は 1870 年に一つの大きな節目を迎える。この年の初等教育法の成立は、公費補助を受けて開設されていた国民協会と内外学校協会とによる小学校に加え、それらの学校のない地域に新たに教育委員会立の小学校を設置することによって、すべての子どもを対象とする初等教育の実施を制度的に確定したものであった。また、ここでそれまでコミュニティ内の教育機関として大きな役割を果たしてきたおばさん学校等の私営基礎教育学校は、制度上一掃されることになった。これ以降、民衆の子どもたちの場合、12 歳ないし 14 歳まで、国民協会、内外学校協会という宗派団体系の学校か、教育委員会立小学校（ボードスクール）かに在籍することになり、自叙伝には、学校間の移動の話はほとんど登場しなくなる。初等教育の法制的整備のもとで、学校を選ぶことは、国教会またはカトリックの宗派系の学校にするのか、それともボードスクールにするのかという最初の選択だけのことになる。否、それらのいずれかの学校しかなかった地域も少なくなかったから、そこでは当然選択の余地などなかったのである。ただし、その時代には、教育方針によって学校を替えることがまったくなくなったのかといえそうではない。後に紹介するデージー・カウパーの場合、国民協会系の小学校での体罰に怒った姉と母は、その学校をやめ、姉の通う夜学校を併設していたボードスクールに転校させている<sup>(22)</sup>。しかし、これはたいへん稀な事例といえよう。いずれにしろ、この時期以降、学校教育に関する人々の選択は、何歳まで教育を継続するか、中等学校への進学をどうするかに移行していくように見える。とくに、グラマー・スクールの奨学金制度が設けられ、あるいは小学校教育に接続する中等教育学校が設置されるようになる 19 世紀末から 20 世紀初頭以降



になると、選択は上級学校進学問題として問われることになる。この進学問題を含む学校教育の終了の仕方をめぐる証言の検討は、本稿にとって興味深い課題の一つとなろう。

以下、第一に、彼らの経験した教育はどのような内容のものだったのか、教師との関係や生徒間関係、学校生活の状況を含めて、学校教育の実際を描くことにしよう。第二に、就学の期間とその終了はどのように決定されるのか、換言すれば、就職の仕方をはじめ社会的自立のありように接近することにしよう。そして第三に、親たちは家庭の中で子どもたちをどのように育てようと試み、学校の教育に何を期待していたのか。労働者家族の子育て・教育観を検討することにしよう。

## II 教育内容と学校生活

### (1) 1870年以前の基礎教育学校

1870年以前の民衆の子どもたちを対象とする基礎教育学校には、国民協会と内外学校協会という二つの宗派系団体の設置する「公営」学校と、おばさん学校、週日普通学校と称する私営学校とがあったことは前述した通りである。前掲の9人の事例もすべてこの時代のものであり、それぞれの就学した学校の概要についてもすでに触れている。教育内容に関して私営学校間にはかなりの格差があったと思われるが、一部の充実した学校を除けば、そのひらきは、読みの教育に加えて文字の綴りや書き方、計算を教えるかどうか、教えるとしてもどの程度入り口から中に入るかということであり、いずれにしる初歩的な教育の枠内でのことであった。読みや綴りを教える簡単な教科書（『リーディング・メイド・イージー』）もかなり広く使用されていたようであるが、もっとも一般的な教科書は聖書であった。二つの系統の公営学校の教育内容もそれと大差のないものであり、教義問答を用いた宗教教育を重要な柱としていたという点で、私営の学校とは異なっていただけだといってよい。このような全般的な状況のもとで、

フランシス・プレイスの通った私営学校は、校長の努力によってかなり充実した教育活動が展開されていたように見える。彼の経験した教育をまとめておこう。

フランシス・プレイスは、男性教師の経営する二つの週日普通学校を経験する<sup>(23)</sup>。はじめの学校は、一階と二階にそれぞれ大部屋があって120人を収容していた。その教室は、部屋の右手に校長、左手に助教が立ち、その位置から全生徒が見える構造になっていた。授業時間は9時から12時、14時から17時の6時間であった。教育は、教科書を読み、写本を写し、スペリングを暗記することが主な中身で、午後は聖書購読と計算に充てられた。木曜日と土曜日は12時から1時まで教義問答の講話があり、その後休みになった。授業の区切りごとに、生徒は6人ずつ呼ばれて校長か助教の前を通過することになっていた。生徒は順に、授業でやったところを読んだり、コラムを綴ったり、計算の結果を見せたりして自分の席に戻る。間違えた子は列から離れたところに立って手を差し出し、校長による鞭打ちを受ける。これは、比較的多数の自叙伝作者が語る当時の授業風景である。のちのベル＝ランカスター方式は、このような教場の編成と授業の進め方をいっそう組織的にしたものといってもよかろう。

プレイスが通学した二つ目の学校は、システムとしては前の学校とほぼ同じであったが、その教育には工夫があった。そこは40人以下の小さな学校で、首席の生徒と最上級の生徒が、順番に助教（モニター）として校長を助けることになっていた。毎週木曜日には聖書にもとづく説教の時間があったが、その内容は正直、独立、忍耐強さ、勇敢さなどをテーマとしており、少年たちの関心や能力に合ったものであった。土曜日には、新約聖書の一章を読んでコメントさせる授業があり、前回の授業の内容についても感想を述べさせられた。「考え、判断する力を育てるために、自分の意見を述べさせることがその授業の目的だった」とプレイスは理解している。さらに校長は、授業のない木曜日と土曜日の午後に年長の少年たちに自分の書齋を開放し、本を読んで質問することを奨励した。蔵書は多くは

なかったが、知識への欲求と本への関心が育てられたという。

このボイス校長は教師らしい教師だったということであろう。晩年になって書いた自叙伝の中で、プレイスはこの教師について次のように述べている。

ボイス先生は、学識に関しては並の人だったに違いない。彼はどんなことにも学識があったわけではない。しかし、私にとっては、彼の世話を受けていたときには、彼は桁はずれに知識があり、賢い人に思えた。生徒のために骨折り、できるだけうまく教えてくれた。彼はよいアドバイスを与えてくれ、大人になったとき達成できるだろう有望な状況を指し示してくれた<sup>(24)</sup>。

プレイスは成績優秀で首席生を経験する。聖書の章句や説話等を題材とする意見発表においても優秀だったので、校長にとくに気に入られていたという。学校をやめて社会に出る時期が近づいたとき、公文書の書き方やジャーマン・テキスト（法律文に用いられるひげ文字）を特別に教えてもらっている。プレイスは上述のようにボイス先生を紹介したうえで、ここでの教育が自分にとって決定的な意味をもっていたことを述べる。私にとって「多くの正しい観念の芽」も、「判断力や分別する力、結論を導く力」も、ボイス先生のもとでの教育にまで「さかのぼることができる」と。そしてこの「理性の力」が、「青年期に自分の入り込んだ道よりももっと悪い道に迷い込むことを阻んだ」のであり、「私は道德教育の面でもボイス先生に多くを負っている」と述べている<sup>(25)</sup>。労働者の自叙伝からわかることは、プレイスが最初に経験する学校のように、読み・書き・算の初歩的な知識と技法を教え、それを反復練習して暗記させ、順次試験するやり方が、当時の一般的な教育方法であった。しかし、この学校では、生徒の自主的・主体的学習を促し、理解を確かなものにするための配慮や工夫が試みられていたことになる。たとえ一部の学校でのこととはいえ、18世紀後期に早くも、詰め込み型教育とは異なる教育方法意識が芽生えていたことに注目しておきたい。

## (2) 1870年以後の小学校

1870年の制度的整序を受けた後、教育の内容はどのように変わったのか。新しく生まれたボードスクールと国民協会系の小学校での教育内容について、何人かの証言を聞くことにしよう。

1870年法以降、小学校教育は読み書き能力の基礎を育てることを基本としつつも、教育される内容の幅と厚みは増していく。1904年、プレストンで生まれたトマス・R・フrintoffが教育を受けたのは、グリムショウ・ストリート学校と称する共学校であった。授業時間は9時から12時、14時から16時30分の5時間30分であった。朝、笛を合図に整列、行進し、メインホールに入る。そこでミサが行われ、その後教室まで行進し、授業が開始される。読み・書き・算の教育はかなり充実したものになる。計算は簡単な加減乗除だけでなく、代数の基本が教えられる。読みと書きの授業では、動詞、代名詞等の品詞の解剖と分析、時制等の文法的知識も扱われる。さらにエッセイや作文、要約文の指導も行われている。これらの3R'sにかかわる教育に加えて、教育活動は多彩になる。健康と衛生に関する講話が時々開催される。自然史の講義とつなげた田舎への遠足、球根の栽培や速記等のエキストラ授業もあった。また、金曜日最後の授業はお話(宝島等)の読み聞かせに充てられており、生徒たちにとって待ち遠しい時間だったという<sup>(26)</sup>。1893年、プリマスで生まれたウィリアム・ジョージ・エリオットの通学したケンブリッジ・ロード・ボードスクールの場合には、算数の教育は連立方程式を含む代数学、幾何学・三角法からユークリッド幾何学までの広がりがあった。自然科学の知識の断片を教える授業もあり、音楽の選択授業もあったという<sup>(27)</sup>。

学校の教育によって何を獲得し、どのように自分を育てるかは一人ひとりの生徒の側の問題であるとしても、教育の科目・内容や方法は学校・教師ごとにかかなり幅があったといってもよかろう。この点は法的整序以前とあまり変わらないのだが、全般的に教育の充実にむけて取り組みが進展してきているように見える。しかも、先に触れたデイジー・カウパーの自叙

伝からは、それまで支配的であった体罰による教育に代わる、新しい教育指導の観念が形成されつつあったことがわかる<sup>(28)</sup>。1890年、リバプールで生まれたカウパーは、5歳から国民協会の共学幼児学校に入り、同じ学校の小学校、ビッグ・ガールズ・スクールに進む。しかし、この学校に関して楽しい思い出はほとんどないという。薄汚れた校舎、厳格さだけが求められる学校生活、子どもたちに夢を与えるような内容や工夫のない教材、いずれも落胆するほかなかった。ある時猩紅熱で休んだ後まもなく掛け算の試験があり、間違えた彼女は教師から手の裏側を使った平手うちを顔に受けた。子どもをおびえさせ、屈辱感を覚えさせるだけの罰を与える教師への拒絶感が彼女の中で強まる。翌朝、身支度をせかされて涙する彼女から理由を聞いて、憤慨した姉と母親とが学校を変更するために動いたことはすでに紹介したとおりである。転校後の新しい学校での経験は、カウパーに新鮮な驚きを与えた。彼女はまず、そのボードスクール少女校の女性校長の「魅力のとりこになった」。その先生は誰にでもやさしく親切だったので、「しかられてもうれしく」さえあったという。やがて先生は結婚退職することになり、学校全体で送別のティー・パーティを開いている。後任のジョーンズ先生との出会いは、彼女にとって、その後の人生を左右するほど大きな影響を受けるものになった。「自分の性質の中に後天的に刻み込まれた良好な特性は」、母親と、後に入学する師範学校の副校長とこのジョーンズ先生とに負っていると述べる。この学校では、悪い成績をとると鞭打つやり方をやめていたようである。新しい教師が、鞭打ちのためにジョーンズ校長のもとに子どもを送ろうとすると、その教師は「課題を達成することのできない子がいるということは、子どものせいではなく、教師のせいであることを理解するようにさせられた」という。カウパーにとって通学は毎日の喜びになった。彼女は14歳までこの学校に在籍したのち、ピューピル・ティーチャー（教員見習生）を経験し、師範学校に進んで教師になる。

1912年、ケントとサリーの州境の小さな村で生まれたウィニフレッド・

レルフの通った学校は国民協会の小学校であった。その学校は教会の建物を使って開設されていた。つまり、週日だけ、祭壇と聖歌壇を板で囲い、折りたたみのガラス戸で仕切ることによって教室を二つ、幼児教室を一つ造っただけのものであった。男女共学で教室は約25人、机と椅子は二人掛けのものだった。このようにこの学校は、施設・設備の面ではまったく不十分なものであるが、教育活動の面では工夫に富んでいたようである。この頃になると読み・書きの教育においても、各地でいろいろな経験が蓄積され、交流されていたのかもしれない。たとえば、言葉や文字の授業は、時々歌や遊戯、ゲームとともに行われたので楽しく学ぶことができたという。歌やゲームにはかなりの数のメニューがあった。図画や工作の時間もあった。女子には裁縫やクロスステッチ、編み物が教えられた。編み物の時間は男子にもあった。金曜日の午後には、授業で習った童謡や詩を歌ったり、演じたりした。そのために家から服や道具を持ち寄ることもあった。誕生日に与えられるプレゼントも愉しみの一つだった。教師たちは厳しかったが、その教師たちのことも懐かしい思い出になっている。はじめの先生はピシャリとたたくことがあったが、みんな叱られるのを愉しんでいた。次の先生は壊れた椅子の足で机をたたく「気性の激しい」年配の女性だったが、そんなときにはみんな鼠のように静かになった、というように。次々に交代した教師について、その服装や容貌、態度等をよく覚えているという。教師たちは「ビクトリアニズム的厳しさ」をもちながらも、「子どもは動き回ることが好きなことを知っていた」し、「小さな子どもたちを幸せな気持ちにさせる能力を持っていた」と評価する。8歳のとき父親と死別していたレルフの学校生活は、14歳で終了することになる。「私の真の子ども時代は」父の死とともに終わったというが、学校生活は幸せな思い出として残っている<sup>(29)</sup>。

### (3) 子どもたちの学校生活

学校に通うことによって、子どもたちの間にはどのような関係がづくり

出されていたのだろうか。学校生活をめぐるいくつかの特徴的なエピソードを拾い出しておこう。そこに、学校という場で作られる子ども集団に関する興味深い姿が浮かび上がるからである。

その一つは、「いじめ」である。1811年生まれのアレキサンダー・サマヴィルの場合、彼が入学したのは、労働者の子どもも農場経営者の子どもとともに学ぶ学校だった。比較的裕福な土地もち農民であっても、近くに寄宿制のグラマー・スクールがなかったり、家庭教師を雇うほどの資力がなかったりする場合、地域の週日普通学校に子どもを通わせることはめずらしいことではなかった。この階層的に入り混じった子どもたちの集団の中で、採石場や農場で働く貧しい労働者の子どもで、つぎをあてたみすぼらしい服装のサマヴィルは、いじめの標的にされる。「ラディカル・ゲーム」という遊びで、彼はいつも「ラディカル」にされる<sup>(30)</sup>。ラディカルとは、当時、社会改革を求めて出現した民衆運動とその担い手に対する一般的な呼称であったが、この地域では平穏な暮らしや秩序を破壊し、乱暴狼藉を働く者たちとの風評が広まっていた。そこでラディカルをみんなでやっつけてしまえ、というのがこの遊びとはいえぬ遊びなのである。サマヴィルは集団的に暴行を受け、服はビリビリに破られてしまった。それは暴力的なケンカの様相を呈したので、教師が介入することになる。「誰がケンカを始めたのかの問いに、みんなが私を名指しした」ために、教師の執拗な鞭打ちを受けることになる。いじめのリーダー格の生徒は、学校のパトロンにもなっていた農場経営者の息子であった。校長のその子に対するえこひいきははっきりしていたし、サマヴィルは「先生との厳しいトラブルに陥った」。彼はその後もからかい、いじわる、挑発の対象になりつづけた。彼が座る椅子の足を壊されたり、ピンを抜いておかれたりした。そこで座ろうとするたびに、みんなの笑いの中で椅子の修繕をしなければならなかった。教師は見て見ぬ振りをしていた。それだけでなく、教師は冬の寒い時期に、隙間風の入ってくる部屋の隅の石炭置き場に彼の席を移してしまう。その学校では、成績がよいと週末に半ペニー分の紙と羽ペンを褒

美として与えられていたが、彼はそれも無視されるようになる。彼へのいじめが終わるのは、教区教会の学校に転校したことに加え、ビジネスマンになり共済組合や教区で活動を始めた兄のおかげで、家族みんなが周囲の人から一目おかれるようになってからのことだという<sup>(31)</sup>。

二つ目は、学校間の生徒同士のケンカや抗争である。前述の「ラディカル・ゲーム」にも社会問題が反映しているのだが、さらに深刻な学校間の抗争もあった。1904年、プレストン生まれのトマス・R・フリントフによれば、北アイルランド紛争が激化していた時期、彼の暮らしていた北イングランド一帯ではカトリック系とプロテスタント系の学校の生徒間の抗争が起こり、死闘に及ぶこともあったという<sup>(32)</sup>。子どもの世界にも社会情勢は複雑な影を落としていたのである。

これとは違って、開かれたかたちでの学校内外のケンカもあった。フランシス・プレイスが学校に通っていた18世紀後半のロンドン市中でのことである。彼が最初に学んだ「残忍なジョーンズ」という渾名の校長の学校での経験である。そこでは、しばしば年長の子が年少の子にケンカを仕掛けたり、ボクシングの試合を強いたりした。近くの年長者対象教養学校（フィニシング・デイ・スクール）とのケンカは、年長者学校1対彼の学校2という人数配分で行われた。少し離れたところにあったバートさん経営の学校との間にも、闘いが絶えず起きていた。そのケンカは6対6でなされた。それらは、いずれも何らかのルールのもとで「システムティックに」行われており、一種の遊びというべきものだったのだろう<sup>(33)</sup>。

三つ目は、体罰とそれに対する子どもたちの対応である。本稿で対象とする自叙伝が描いている全期間を通じて、学校教育の中で体罰は当たり前のこととして実施されていた。そのもっとも一般的なものが鞭打ちであった。子どもたちは遅刻をするとたたかれ、行儀・作法や態度が適当でないとみなされればたたかれた。随時繰り返される口頭試問に間違えてもたたかれた。親たちも校長の処置は間違いないものと思っていたので、たとえ傷を負っても親に言わないことが多かった。いじめや体罰を繰り返されて



いた前出のサマヴィルの場合も、そのことを両親には話さなかった。なぜかといえば、「それを言えば母は悲しむだろう。父は校長が正しいと思うだろう。教師としての校長の無謬性を信じていたから」だったという<sup>(34)</sup>。

そこで子どもたちの一部には、鞭打ちを受けることを「試練」に耐えることを競うゲームにしていた事例もある。これもフランシス・プレイスの証言である。それは、生徒同士で、どれだけ罰に耐えることができるかを互いに誇示しあう競争である。どれほど上手に、たくさんの鞭を手に受けることができるか。そして、そのことにたじろがないかという挑戦である。誰かが鞭打たれるとき、試練に耐えるようにはやしたてる声が、周囲の少年たちから起こされる。こうして勇気があるかどうか競われる。その騒ぎは、今度は、はやしたてた子どもが罰を受けるまでつづく<sup>(35)</sup>。これは、受け入れざるを得ない体罰ならば、それを痛みに耐えるゲームとして競い合うとともに、励ましあって乗り切ろうというものである。体罰に対するこのような対応がどの程度の広がりをもっていたのかはわからないが、この発想の子どもらしいたくましさ注目しておきたい。

### Ⅲ 就学の期間とその終わり方の問題

#### (1) 学校で学ぶことと職を得ること

19世紀を通じて、イギリスの社会では、熟練技能習得のための本格的な訓練開始の年齢は14歳とされてきた。それは、熟練工の仕事は骨の折れる高度な技能を要するものであって、14歳以下の子どもには、そのような技能を習得させる訓練の実施は無理だとする経験則的な判断によるものであった。14歳で親方のもとに弟子入りし、7年間の年季奉公を経て自立するが、その後数年間、腕を磨くために「渡り」としていくつかの職場を経験するのが、熟練工養成の一般的プロセスだったのである。人々の意識のうえでは、この職業技能の習得の困難さに比べて、読み書き能力の獲得はそれほど難しいものとは考えられていなかった。言語能力は子どもが

大人になるために獲得すべきものの一つであっても、その優先順位は必ずしも高くはなく、「仕事のための訓練からは逃げることはできないが、読み書きの学習はなしで済ますことができる」とさえ考えられていたのである<sup>(36)</sup>。前出のトマス・クーパーが「私は教えられることなしに読むことを学んだ」と述べているように、聡明な子どもにとっては、特別の教育なしに、当時の基礎教育学校で教えられていた水準の言語能力を獲得することは不可能なことではなかった。ただしそれは、まったく誰からも何の手助けも受けなかったとは考えにくく、読み書き能力をもつ親か周囲の大人かによる何らかの手ほどきや援助があったが、まとまりのある教育としての経験ではなかったということなのであろう。

時代が下るにつれ、言語能力習得の優先順位は高くなっていくが、子どもの就学は、いうまでもなく家庭経済の許容する範囲内でのものであった。初等教育の制度化（1870年）・義務教育化（1876年）以前には、9ないし10歳までで、場合によってはそれよりも下の年齢で就学を打ち切っても当然とする考えが一般的であった。例えば本稿でとりあげた自叙伝作者についていえば、ジョセフ・アーチは4年間の学校教育の後、9歳で農業労働に従事し、チャールズ・ショウは約3年の教育の後、7歳から製陶工場働いている。トマス・ウッドも8歳で学校をやめ、紡織工場の雑役労働に就いているし、ジョン・ウィルソンも9歳から採石場で働き始めている。このうちT・ウッドは、紡績の紡ぎ手として13歳まで働いてから14歳で機械工の徒弟として弟子入りし、熟練工を経てエンジニアになるという経歴をたどる。このように徒弟奉公に入るとしても、ほとんどの人は14歳になるまでの期間、学校を離れるとすぐに何らかの仕事に就く。だがその仕事の多くは補助的・雑役的なものであり、徒弟に入る条件を手にすることができなかった人々の場合には、長期にわたって従事できる比較的条件のよい仕事を求める苦闘が続くことになる。しかし、そうであっても、このような就学と就労の条件は、いわば当然のこととして受け入れられていたのである。したがって、前述のウィルソンのように校長から目の

敵のように扱われ、直接責任のないことで鞭打たれたとき、それに反抗したことによって放校処分になり、学校生活が不本意な形で終了することになっても、彼は、教育の中断によって自己の将来にかかわる深刻な不利益を被ることになったと受け取ってはいない。むしろその事件は、自らの誇りにかかわる問題として扱われているのである。

貧しさに加え、父親が幼少時に死亡している場合、自叙伝の書き手たちは就学期間が限られたものになることを当然のこととして受け入れている。トマス・クーパーは、前述のように、染物職を細々と営む母親のもとで育つが、一つの学校では慈善団体の奨学金を得、次の学校ではチューター（助手）として遇してもらえたため、貧しい生活ながら14歳まで学習に集中できる条件に恵まれる。しかし、15歳になると働いて自立する道を探めなければならなくなる。この職探しの過程について、クーパーは次のように述べている<sup>(37)</sup>。はじめ塗装工に、次いで事務員に奉公しようと思い申し込むが、いずれも指導料を払えないために断られる。近所の人たちは「上等のところばかり狙うから、役に立たぬ穀つぶしになってしまう」と悪口をいい、彼を見る目が厳しくなった。友人の父親の紹介で、9日間帆船の積荷の作業に加わってみたが、罵り声や乱暴な態度を目撃し、とても自分には勤まらないと思う。海で働く親戚をもつ隣人たちは、彼を臆病者とあざけた。結局彼は別の友人の勧めで、その友人が奉公している靴職人に弟子入りし、彼の職業生活を開始することになる。クーパーが靴職人の道に進むことをめぐって母親は嘆き悲しむのだが、それは次節で取りあげることにしよう。いずれにしろ、クーパー自身はやむを得ない進路としてそれを受け入れていくのである。

## （2）進学断念と学業の中断

19世紀末以後の時期になると、学校をやめ就職するというプロセスは、一部の人々にとっては進学断念の問題として、いっそう重い意味をもつことになる。初等教育制度の定着の後、民衆の間にも中等教育や何らかの継

続教育の機会を求める動きが広まり、ローカル・グラマー・スクールの奨学金枠の拡大や初等教育後教育としての公立上級学校（ハイアー・グレード・スクール）の設立が進む。自叙伝の作者たちはこの進学問題にどのように向き合うことになるのか。

トマス・R・フロントフの経験によれば<sup>(38)</sup>、12歳になったある時、何人かの生徒が呼び出され特別の試験を受けた。後日彼は校長に呼ばれ、ローカル・グラマー・スクールに進みたいかどうか尋ねられた。彼は入学試験に合格していたのである。しかし、彼は母親に相談することなしに、それをすぐに断っている。父親は彼の10歳の誕生日直前に死亡しており、母と姉が工場で働いていたのでグラマー・スクールに行くことなど考えようもなかったのだという。当時は13歳になればハーフタイマーとして働きはじめることが可能だったので、その年の夏休みに仕事を探しはじめ、綿工場のハーフタイマーとしての仕事を得た。翌年、14歳で同じ工場のフルタイマーになっている。ところでハーフタイマーとはどのようなものか。朝6時から12時30分まで仕事に従事し、学校の午後の部に出席する。午前中6時間30分の労働時間のうち、8時から8時30分までの30分間朝食休憩がある。次の週は午前中通学し、1時30分から5時30分まで勤務に就く。これを交互に繰り返すのがそのシステムである。フロントフはグラマー・スクールへの進学はあきらめるが、フルタイムの仕事に就いてのち、夜間開講の継続教育の機会を活用して商業文や速記等の学習を続け、事務職への道を開いていく。

ウィニフレッド・レルフの場合<sup>(39)</sup>、8歳の時愛する父親と死別する。その父は学校のことや彼女が昼間やったことなどにいつも関心をもち、日曜日には一緒に遊んだり散歩に連れて行ってくれたりしたという。「私の真の子ども時代はここで終わった」と彼女は書いている。一夜にして、幸せで安定していた家族の暮らしが崩れてしまう。教師になりたいという希望は祖父によって認められなかったそうであるが、金銭の苦勞なしに育ち、結婚後も幸せな生活を送ることができていた母親の、困惑しイライラする

姿を目にすることになる。下宿人をとるが、生活は困窮する。したがって彼女にとって、14歳で女中奉公に出ることはほかに選択の余地のない道だったのである。レルフは、同様に14歳で学校をやめ奉公に出た仲のよい友人のことも紹介している。ある日、友人モリーは教師から、奨学金テストを受けるようにとの手紙を母親に渡すように手渡される。しかしモリーはそれを母親には渡さずに池に捨ててしまい、残念ながら経済的余裕はないと、まるで母親が言ったかのような返事をしていたことを記憶しているという。レルフは、その後、家事手伝いやベビー・シッター等を経て、看護婦、看護学校助手の仕事に就くことになるが、その間28歳から女子カレッジの成人学生として学んでいる。

なかには、80歳代という最晩年に至るもなお、自らの学業中断の理由についてわだかまる思いを残している人もいる。ウィリアム・G・エリオットは、家族の転居後転校せずに、片道約2マイルも離れたそれまでと同じ学校に通わされた。そのうえ彼は、ある時から新聞配達、書籍販売所、列車の売店等、いくつもの仕事をしていたことを覚えている。なぜそのようなことになったのかはわからない。勉強の進歩が早すぎたからなのかもしれない。「私に起こったことはミステリーのまま」だという。彼は14歳のとき、ラッパ手見習いとして海兵隊に入隊させられることになる。父親は海軍工廠で働き、後に兵学校のメッセンジャーに雇われていたので、「豊かではないが借金のない」暮らしだったという。彼は、それなのに「なぜ」という思いや、自分の進路の選択に関して父親に問うことができなかつた悔やみを抱え続けることになる。「私はいつも質問をさしはさまずに、言われたとおりにしてきたし、そうするように育てられた。なぜ私は学校に行かなかったのか。父はこれらすべてのことにかかわっていたに違いない。」「父はとにかく私の才能を活かさなかつた。おそらく経済的な事情が影響していたのだろう。しかし父は、私が読みやすく文字を書くことができ、数学が得意で、科学の知識もかなり持っていたことを知っていたに違いない。……このこと（私を説得するような話もせず、海兵隊に入隊させたこ

と——引用者)について、私は口をはさむ権利をもたなかった」と<sup>(40)</sup>。子どもたちの学業と進路が父親によって一方的に決定されることは、当時、ふつうに起こり得る状況だったと思われるが、このエリオットの記述は、父子間の心の交流さえも成り立っていなかった様子を伝えるものとして際立っている。

20世紀初頭になると、奨学金枠も少し増え、グラマー・スクールにも少人数ながら無料枠が設けられるようになる<sup>(41)</sup>。しかし、たとえ奨学金試験に合格したとしても、中等学校への進学はたやすいものではなかった。子どもが就学している期間、その子の収入の放棄を覚悟するとしても、教科書などの教材費、被服費、交通費その他通学に要する費用の負担に耐えられない場合が多かったのである。たとえば1904年、ヨークシャーの炭鉱村で生まれたベシー・ウォリスも進学を断念している<sup>(42)</sup>。炭鉱のロープつなぎ職人の娘であった彼女は、高い知性をもつ少女との評判を得ており、州の奨学金に合格する。しかし、本や制服や交通費のためのお金はなく、「はじめから悲運は決定づけられていた」のである。ウォリスは13歳で奉公に出る。その後、イブニング・クラスで速記、タイプ等を学び、事務職の仕事を得ている。

エディス・ウィリアムスにとって、中等学校のことはずら苦い思い出として残っている。ウィリアムス<sup>(43)</sup>は、1899年、南ウェールズの産炭地の町で鉱夫の娘として生まれる。4歳で学校に通いはじめるが、まもなく古くて狭い学校に代わって新しい「教会学校」ができ、その最初の入学生になる。長女だった彼女は、7人の弟妹の面倒を見つつ通学したが、「飲み込みが早く、トップ4人のうちの一人」だったので、飛び級によって早期に進級した。上級学校を受ける経済的余裕はなかったが、教師になりたかったので学校に残ることを切望していた。しかしそれすらかなわなかったため、不当な扱いを受けたように感じた。12歳で学校をやめてよいといわれる。その時すでに教育標準の最上級を学んでおり、現在の教科書ではもう学ぶことがないからとの理由によるものだった。

小学校をやめて2、3ヵ月後に、ウィリアムスに一つの転機が訪れる。子守をしていたある日、上級学校の女教師がやってきて、彼女を学校に入れるように母を説得した。入試に合格できるように、そして先に学んでいるほかの生徒に追いつくことができるように、特別指導をしてくれるとの提案がその先生からあった。彼女は喜んで努力し、女子対象の新しいグラマー・スクールに進学する。大家族のため家で勉強できる条件がなかったので、列車通学の時間をうまく活用した。一緒に通う友だちと学習結果をチェックしあったりもした。彼女は教科書を購入できなかったが、はじめのうちは裕福な子たちが彼らの本をシェアしてくれたので、学習を続けることができた。しかし、専門書を使うことなしに家庭学習ができなくなったときに、困難が襲ってきた。やがて、このような環境のもとでは、通学を続けてもよい成果は得られないだろうとする最後通牒が貧しい子たちの両親のもとに送られてきた。それは、このような事情による奨学金の早期辞退であれば、他の事情による辞退の際に課される重い罰金が免除される、というものであった。こうして、ウィリアムスにとって喜びに満ちたグラマー・スクールでの教育に終止符が打たれた。「私にとってそれは若き日の夢の終わりであった。私の心は打ちのめされ、苦い思いを抱え、剥奪されたという意識はとても強く、その後長い年月、この悲しみの種を培養し続けた」と述べている<sup>(44)</sup>。この後、彼女は14歳で仕立て職の徒弟になるが、第一次世界大戦の勃発に伴う動乱のためにそれは中断され、保母兼家庭教師、メイド等を経験する。成人教育機会学び、後年、社会福祉活動や政党（労働党）の運動に加わり、調停裁判所のメンバーに選出されるなどの活躍をする。しかし、彼女は晩年になって、「トレベリアンの『イギリス社会史』を読んで刺激を受けたので自分のライフヒストリーを書こうと思った」と書き出している自叙伝の中で上記のように述べるほど、通学を断念するに至ったいきさつは、彼女にとってもっともつらい思い出として残ったのである。自叙伝におけるこの表現は、いったんあきらめたものが教師の善意によって叶い、手にした学業の喜びが再び奪われてしまうと

いう経験によって刻まれた心の傷は、癒えることがなかったということなのであろう。これは、ウィリアムスよりも半世紀以上前に、チャールズ・ショウが昼下がりの公園で読書している若者の、自分には許されない姿を目撃してはじめて覚えた「みじめさ」の感情・「心に突き刺さる激痛」と重なり合うものといえよう<sup>(45)</sup>。労働者階級の子どもたちは、ある時、その強さの度合いは区々であっても、自分の人生と進路を条件づけている客観的現実に直面させられる。それは多くの場合、通学期間の終了の問題として現れる。ただそれを、いわば当然のなりゆきであるかのように、淡々と記述している自叙伝が多い。つまり、それは、自叙伝の書き手たちが、学業の中断や上級学校への進学断念とそこから始まる自己のその後の人生について、消極的にあるいは否定的に評価してはいないからにほかならない。その点に関しては、エディス・ウィリアムスの場合も同様である。しかし、この学業中断の問題は、自分と家族の置かれている社会的現実の認識とともに、何らかの屈折した思いを彼らの胸に刻み込んでいたと見るべきであろう。20世紀に入ると、初等教育制度の定着につづき、民衆の子どもたちにも中等教育に進む可能性が少しずつ開かれ、「中等教育をすべての者に」を求める社会運動が展開されるようになるが、こうした変化を背景として、中等教育への進学断念問題が、とくに女性の自叙伝に記述されるようになる。しかし、他方、ごく少数であるが、中等教育を経てさらに高等教育に進む人々も現れるようになる。この上級学校への進学にともなう問題、とくに高等教育を経験することをめぐる問題の検討は、次の機会に譲ることにしよう。

#### IV 家庭の教育と学校の教育 —— 労働者家族の子育て・教育観

##### (1) 子どもが親から受け継ぐもの

自叙伝のなかには、父母の教えや家庭での教育について、学校での教育と関連づけながら、かなり分厚い記述を残しているものがある。また、学



校教育に大きな期待を寄せるものがある一方、学校教育の実際にするどい批判を展開しているものもある。これらの証言を手がかりに、労働者家族の子育て・教育観への接近を試みることにしよう。

自叙伝の書き手たちは、一部の人を除いて、親の愛情を感じ取り、その教えを受けとめながら成長している。フランシス・プレイスにとって、父親はすぐ体罰に訴える怖い存在だった。「父は子どもと会話形式で話すことはなく」、自分たちも「父に向かって質問することなどなかった」という。しかし、体罰は姉たちに対してはなされなかったし、自分たちを傷つけようとしていたのではないことを知っていた。当時の一般的な傾向であったのだが、父親は「自分の考えに従うように強制することが、子どもたちの失敗をなくす唯一の方法」だと信じていたに違いないという。プレイスが学業の面だけでなく、道徳教育の面でも学校のボイス先生に多くを負っていると述べているのは前述の通りである。しかし、同時に彼は、自分の「子どもたちが正直で、まじめで、勤勉で、あらゆる面でリスペクタブルという言葉通りであること」を望んでいた父親の思いもまたしっかり受けとめていたのである<sup>(46)</sup>。

ジョン・ウィルソンは、母親と幼少期に死別し、鉄道工夫の父親に連れられて各地を転々としながら育ち、その父とも12歳で死別する。しかし、父親の教えは格別の重さをもって彼に響いている。ウィルソンにとって、父親は放浪生活を送っていても「もっとも気高い人」であり、誇りに思う存在であった。それは、「強く、はつらつとし、いつも自尊心をもっていった」からである。父は「卑劣な言行を嫌い」、「私にその性格を刻印するために最善を尽くした。」自己防衛のために、私にノーブル・アート（拳闘）の練習を真似させた。正しいことのための暴力は勝とうが負けようが許されたが、正当な理由のない攻撃に対しては、たとえ負けたことであっても父親からも殴られた。こうした父親の姿勢に対する賞賛の気持ちは、時を経、いろいろな出来事に遭遇した後の晩年に至るもなお変わっていないと述べている<sup>(47)</sup>。

ウィニフレッド・レルフも、8歳で死別する父親の、自分たちに寄せる愛情を感じながら育った。休みの日に、父が自分の子ども時代のことを話してくれるのを聞きながら、一緒に散歩したことは楽しい思い出である。大工・建具職であり、社会主義者・労働組合主義者であった父親は、大変な読書家でもあった。彼女たちにも本を買ってくれ、読書を奨励した。穏やかな人柄であったが、一度だけ怒りをあらわにしたことがあった。それは学校に経営管理者が来たとき、生徒たちが膝を曲げ、体をかがめてお辞儀したことを話した時のことだった。「二度とそのようなことはするな」、「私たちは前に進むことが必要で、百年前に後戻りすることではない」といった父の言葉を鮮やかに覚えている<sup>(48)</sup>。それは、「目上の人」に対するものであっても、旧来の屈辱的な挨拶の仕方を改めるべきだとする父親の考えを示すものであった。レルフにとって、子ども期の短い期間に限られていたが、このような父親から受けた影響は大きく、自身も社会主義者として後半生を送ることになる。

ジョセフ・アーチもまた、生活の姿勢やものの考え方を父母から受け継いでいると述べている<sup>(49)</sup>。父親は農業労働者としてオールラウンドに仕事ができ、勤勉、堅実、穏健な人柄の人であった。他人をたてるが自分の意見を持ち、地主や牧師に施しを受けるために頭を下げることをしなかったという。母親も賢く、意志の強い人だった。アーチは、とくにこの母親から受けた「訓育（教えやたとえ、アドバイスとも表現されている—引用者）が僕を鍛え、僕の生き方を形づくった」という。ケンカに巻き込まれそうになるとそれをいさめ、「友達をつくりたければ親しみやすさをもたねばならない」と諭された。「自分でできることは自分でやりなさい」と大人になるまでいわれ続けた。「自立と自助」は自分をつらぬく主義になっているという。また、母親はシェークスピアを賞賛し、その物語を聞かせてくれたり、読み聞かせをしてくれたりした。日曜日には聖書の読み聞かせや解説があった。だから、自分たちはシェークスピアと聖書の物語によって育てられたようなものだと述べる<sup>(50)</sup>。

アーチは、自分たち子どもに対する母親の教育は、「教育」という「言葉の真の意味」にふさわしいものだったと語る<sup>(51)</sup>。その記述を抜粋しておこう。「私は自分の子ども時代の日々を振り返るとき、……私は『ゆりかごを揺する手が世界を支配する』という、よく知られたことわざに多くの真実があることを知る。」しかしながら、どのような手がどのように揺するのかが問題だとしたうえで、アーチは次のように自分の母親への感謝の気持ちを述べる。「新しく生まれた赤ん坊のゆりかごに、良いものであれ悪いものであれ、妖精が贈り物を持ってくると人々はよく口にすると、そのように信じている。…（中略）…私の母は、ある意味で私にとっての良い妖精だった。彼女は私に健康な身体と強い頭脳という、すばらしい贈り物をくれた。そして、仲間への共感、誠実さ、目的への不動の姿勢という、私がとくに自分の手柄にすることができないような性質のいくつかを、母は私に与えてくれた」と。こうして「母は、自分の生涯を通じて、姉たちと私とを教訓や実例によって教えた。母は言葉の真の意味で私たちを教育してくれた。母は私たちが村の学校で手に入れたどんな知識についても、それを補充し公正な学識を育てるための役割を果たしてくれた。そして私が学校を終えた後の空白期にもそれはつづいた」という。前述のように、アーチは6歳になって通いはじめた村の教区学校を9歳になる前に離れている。彼は、農場のカラス追いの仕事から労働生活に入っていくが、その賃金で本を買い、毎日帰宅後勉強する。その際、母親は自分がわかることであれば、難しい内容を説明したり、こんがらがったところを解きほぐす手助けをしたりしている。さらに彼女は、習字の手本を書いたり、書き取りの課題や算数の問題を与えたりもしている。こうしてアーチは、わずか3年にとどまる学校教育の不十分さを独学で補っていく<sup>(52)</sup>。母親の熱意と援助がそれを支えている。この母親の知的能力がどのように形成されたのかは、自叙伝からはわからない。ただ、彼女は手紙を書くことにも優れていて、喜んで周囲の人たちの代筆をしていたとの記述もあり、当時の民衆の、とくに女性たちの間では読み書き能力のきわめて高い層に属していた

とってよかろう。彼女は結婚前にウォーリック城の家事サービスに従事していたとのことで、どこかで何らかの教育を受けた経験があるのだろう。自叙伝の書き手たちは、多かれ少なかれ、学校で得た読み書き能力を元手としながら、本を読むことによって自己の知的能力を育てているが、アーチの家庭のような、とくに母親の手による読み書き能力の教育の事例は、きわめて稀なものといってよかろう。

## (2) 学校教育への期待とその意味するもの

前項に見たように、生き方の基本姿勢は親から子へと受け継がれていく面が強いが、労働者家族にとって、読み書き能力をはじめとする知的能力の形成については、ふつう、学校の教育に依存するほかはない。アレキサンダー・サマヴィルは、学校への期待を語る父親の言葉をはっきりと記憶している。それは、前述のように、学校でのラディカル・ゲームによってぼろぼろに裂かれた服を母親が繕った後で、両親の間で交わされていた会話である。彼のために新しい服を購入することができるようになるまで、学校を休ませるべきだとする母親の意見に対して、父親は次のように言う。「もしもこの子が大人になるまで生きていとすれば、彼は教養を必要とするだろう。そしてそれは、私たちが彼に与えることができるもの以上のものだ。もしも私が、自分の息子たちみんなに与えようと努力しているような学校教育を私自身が受けることができているならば、そのことは私にとって、これまで歩んできた道よりももっとたやすく世の中を渡っていくことの助けとなったであろう。若者は学校に行かなければならない」と<sup>(53)</sup>。サマヴィルが学校に通ったのは1820年前後のことであり、初等教育はいまだ制度化されてはいなかった。しかし、サマヴィルの証言は、この時期にすでに、労働者家族の中に、自分自身の経験に照らして読み書き能力・知的能力の実際的効用を考え、学校教育の必要性を感じとっている人々が生まれていたことを教えてくれる。

トマス・ウッドは、1820年代後半、6歳から8歳まで、寄付金立グラマー・

スクールでラテン語の授業を受けている。それは、前述のように、評判のよい私営学校には授業料が高くて入ることができず、グラマー・スクールの中で、そのラテン語コースだけが無料だったからである。当時、民衆の間にはラテン語を学ばせることに否定的な風潮が強かったのだが、彼がきわめて稀な経験をもつことになったのは、無学の祖父の意向によるものだった。学ぶことは、「人生の実用的目的に照らして、その質や適合性について問うことを必要としないほど偉大なことである」とするのが祖父の考えだったという<sup>(54)</sup>。実用的な効用だけに限定せずに学ぶことの意義を考える意識が、広がりはじめていたとってよいのかもしれない。しかし、ラテン語の学習は、当時の人々にとって特別の意味をもつものであったこともたしかである。子どもにラテン語を学ばせることに関して、民衆の間での、それを必要とは考えない意識の強さをトマス・クーパーも伝えている。そこで、徒弟として入職後のクーパーの歩みと、彼が後に開設した学校での経験について触れておくことにしよう。

トマス・クーパーは、グラマー・スクールの教育を受けることなしにその習得は困難であったラテン語やヨーロッパ古典の知識を独学で獲得している。前述のように、自叙伝の書き手たちは学校で学んだ読み書き能力を基礎として、本を読み自己の知的能力を育てつづけているが、クーパーの努力は並外れていた。彼は15歳で靴職人の親方のもとに弟子入りし、3年間の修業ののち通いの靴職人として22歳まで働くが、彼はこの間猛烈な勢いで独学に取り組む<sup>(55)</sup>。11歳での大工奉公からはじめて、独学によって12以上の言語をマスターし、ケンブリッジ大学のヘブライ語教授になったサミュエル・リー博士の評伝を読んだことがもっとも大きな刺激になったという。彼の一日は本とともにあった。毎日朝3時か4時に起床し7時に仕事に就くまでの時間は、ラテン語、ギリシャ語等のいくつかの言語の文法、ガリア戦記等の歴史書や詩人ヴェルギリウス等の古典を学ぶ。30分の朝食には何かの読み物や定期刊行物を手にとり、1時間の昼食（ディナー）時間も、食べ物を砕いてスプーンで食べるようにして読書に充てた。

時には仕事でも語形変化活用やユークリッドの命題、失樂園やハムレットの1節などを暗誦していたという。仕事の終了は8時、時には9時だったが、その後ハムレットや現代詩を朗読し、ぐったり疲れてベッドに倒れこむまでそれを続けた。この7-8年継続した生活の末に、彼は「前に読むことができなかつた言語を読むことができるようになったことに気づく」。「先生の助けなしに」「征服者になった」喜びが、「初めての勝利の感覚の記憶」として語られている<sup>(56)</sup>。歴史書を読むことに喜びを感じるとともに、ミルトン、シェークスピアほか多くの詩人にも関心を寄せる。しかし、働きつつ独学を続ける無理な生活の結果、彼は22歳の時重い病に倒れる。やがて病気からは回復するが、手仕事をしようとする手には震えが残っていて靴職人として働くことができなくなる。そこで友人のアドバイスを得て、23歳になる直前に学校を開設する。

彼の学校は、彼がいつも本を読んでいる「珍しい若者」「学びの天才」と見られていたおかげで盛況だった。12か月コースは100人の生徒を持ち、平均80人の出席があったという。ミドル・クラスからも数人の入学があった。そこでラテン語も教えることにする。教え始めるとすぐに、その子たちが前の学校で教えられていたことの間違いや、彼らに理解させることができている教え方の「まやかし」に気づいたという。クーパーは生徒たちが「楽しい学習者になる」ように工夫する。同時に、彼はすべての生徒にラテン語を教えたいと考え、ミドル・クラスの子の教育とは別に無償で教えるコースを設けた。しかし、何人か進歩の早い生徒が生まれたが、大部分の生徒はラテン語の文章を解釈することができなかつた。子どもたちはラテン語を学ぶことに何の興味もなく、家での刺激もなかつた。親たちの「おろかさ」は「最初から私への妨害になっていた」が、その「気のなさ」はやがて彼の教育方針への「嫌悪感を生みだした。」親たちは言う。「私たちは私たちの坊主にうまく字を書くことを学ばせただけだ。ラテン語の学習は何の役に立つのか。そんなものは何の役にも立たない」と。「私が子どもたちに利益を与えようとしたときに」、しかも「何のコス

トも払わせることのない」ものだったにもかかわらず、「私が貧しい人たちから受けた感謝はそういうものだった」という。そして貧しい人たちにラテン語を教えるということが「歓迎されない骨折り仕事なのだ」とわかった時に、「校長職への情熱を失った」と述べる<sup>(57)</sup>。

ラテン語は日常語とは異なる学術語として使用されてきており、古典古代以来の文化的伝統の継承を必須の教養として求めてきた少数の特権層、知識層の占有物となってきた。ラテン語を習得することは学術文献への接近可能性を手に入れることであるのだが、クーパーの経験は「知」における人々の分裂を打破することの難しさをあらわしている。クーパーの落胆はもっともなことだとしても、ラテン語の学習は自分たちとは無縁のものであり、それに時間や労力を使うことは無益な負担であるとする民衆の間での反応もまた理由のあることであった。

子どもにラテン語を学ばせることに関して、自分たちの生活に関係ないとして敬遠する感覚的な拒否とは異なり、その不要論を明快に表明する人たちもいた。その代表格は、多分、サミュエル・バムフォードの父親であろう。バムフォードはトマス・クーパーよりも四半世紀前に誕生している。彼は無料のグラマー・スクールに通い、英語の読み、書き、初級聖書のクラスで首席になる。校長からラテン語クラスへの進級を薦められるが、父親の指示でそれを断っている。それは次の理由による。「父は、ラテン語は将来医者、弁護士、牧師になることを予定されている人だけによって学ばれるものだ、といった。私はこれらのどれにもならないのだから、その学習は無駄に費やす時間である。英国人にとっては、英文法の知識の方がギリシャ語やラテン語の知識より価値がある。一体なぜ、グラマー・スクールで英文法が教えられないのだろうか」と<sup>(58)</sup>。つまり、ラテン語は特別の職業に就く人たちに必要な特殊な言語であって、自分たちにとって必要なことは日常用いる英語の文法的知識を深めることだ、とするのが彼の父親の見解であった。わが子の幸せのためとして行った父親のこの判断は、重大かつ思慮の乏しいものだったとして、バムフォードはその際に抱いた強

い落胆の気持ちを述べている。上級クラスへの進級を断る彼を校長は疑い深く見つめ、再度質問し、やがて失望の表情を浮かべた。自分より成績の悪い友人が進級し、自分は下のクラスにとどまり、耐えがたい屈辱感を味わった。古典への入り口が自分のそばを通り過ぎてしまった。それは、自分の能力が育ちつつあり、意欲も高まりつつあることを感じ取っていたときの出来事であった。上級学校に向けて援助してくれる教師もいた。もしも自分が古典の学習に導かれていたならば、大学（学問の世界）の対岸にとどまったままではなかったであろう、と述べる。重ねて次のようにも言う。「もしも母が生きていたら、このようなことにはならなかったであろうし、私が歩んだのとははるかに違う人生のコースが私の前に設定されたであろう」と。バムフォードはその後の自分の人生について必ずしも否定的に評価しているのではないが、人生の岐路となった重大な選択について、大きな心の痛みとともに思い起こしているのである<sup>(59)</sup>。

ラテン語の習得は学問への扉を開けることであったが、他方、それは上級学校の教育、場合によっては大学教育を受けて、知的能力を駆使する職業に就く可能性を開くことでもあった。トマス・クーパーは、前述のように、働きながら独学でラテン語や古典の教養を学びとっているが、それより前、15歳で靴職人のもとに奉公に出ることを決めた際の母親との応答を次のように記述している。

母はその（靴職人に弟子入りするという一引用者）申し出に傷ついたように見えた。母は幼児期から私の才能を具に見てきた。そして、私の中にある知性のつぼみをいつくしみ育んできた。息子が錐をもった低級の労働者になるのとは大きく異なる理想を子どもの未来として描いてきた。しかし、私は母に懇願した、許してほしいと。そして言った。役に立たないろくでなしと言われる日々の責め苦に耐えられないと。とうとう母は譲ってくれた。「神の意思に任せましょう。主はあなたに靴工として一生を過ごさせるとは思わないけれども。私はあなたを学校にやり、学びたければあなたの願い通りにするために一生懸命働いてきた。あなたが靴づくりにな



ろうとすることなど夢にも思わなかった。でも神の思し召すままにしましょう。主がやがてうまく取りはからってくれるでしょう」と<sup>(60)</sup>。

この母親の嘆きの意味するものは何だろうか。クーパーは、4歳のとき死別した父親の仕事（染物工）を引き継いだ母親との貧しい暮らしの中で育つ。家族についての記述がないのではっきりしないところがあるが、おそらく母一人子一人だったように思われる。その貧しさにもかかわらず、彼は働くことから免れたまま、後には奨学金等の幸運にも恵まれて14歳まで学校にとどまることができたのだが、その経緯はすでに述べた通りである。それでは、彼の母親が息子の将来像として期待していたものは何だったのだろうか。そこに靴工等の「低級の労働者」を蔑視するような表現があるとしても、子どもの才能を生かす職業を求める願望は、差別意識や上昇志向と同列視してよいものかどうかについては慎重な検討が必要であろう。そもそも19世紀前期のこの時代に、特別の知的能力を必要とする職業はどの程度の広がりをもつものになっており、職業的階層秩序と学校での教育とはどの程度の相関をもつものになっていたのだろうか。一般的に言えば、上級学校への進学が社会的上昇の手段として明確に機能するようになること、しかもそれが大衆的基盤を持つようになることは、階梯的学校制度成立後のことであって、イギリスの場合には19世紀末以降のことである。それでは、クーパーが生きた時代に知的能力を生かす職業を求めることは、事務員の徒弟や商人への奉公等への道があるとしても、どの程度の現実的可能性をもっていたのだろうか。またそのことと、社会的上昇の意識はどのように絡み合っていたのだろうか。教育の継続や上級学校進学を求める意識と、自己の所属する階級・階層からの離脱・上昇移動を求める意識とは、それぞれどのように形成されてきたのか、そして、それらはどのように相互に関連しあってきたのだろうか。これらの論点と重ねて討論することによってはじめて、クーパーの母親の嘆きや前述のバムフォードの抱きつづけた心の痛みの意味するところを解釈することができるだろう。その検討は、進学問題に焦点を当てる次回の作業に譲ることにしたい。

### (3) 学校の教育 対 家庭の文化

労働者家族の子どもたちが学校教育を経験する際に直面したものは、前項までにとりあげてきた問題だけではない。そこには、すべての子どもたちが向き合うことになる、より根底的な意味をもつ問題があった。それは、学校での教育の内容と、家庭や地域の中で親たち・大人たちから伝えられるものとの間の大きな落差を子どもたちが経験することになったということである。学校形態による民衆教育の組織化は、民衆の子育て・教育の努力に順接されるものでないだけでなく、逆に、家庭の教育の価値の排除を企図するものであったといってもよい。イギリスにおける労働者の自叙伝研究の開拓者の一人、デイビッド・ヴィンセントが、自叙伝の書き手たちが経験した教育に関する分析においてもっとも強調しているのはこの問題である。彼の著書『Literacy and Popular Culture (読み書き能力と民衆文化)』における当該箇所を要約しておこう<sup>(61)</sup>。

「初等義務教育創設に向けての長い旅は、家庭教育の価値の全面的排除をもって開始された。」民衆教育の運動の担い手は、初期の段階は教会であり、次いで国家に移るが、それは「無知で墮落した親に子どもの教育は任せられ」ず、「公共的関心事」たるべき子どもの教育は「公共事業」として取り組むことが必要であるとする考えによって推進された。したがってその推進勢力にとって、「初等教育は家庭での学習を補充することではなく、むしろ、それにとって代わるもの」でなければならなかったのである。ヴィンセントは、このように歴史的概要を説明したうえで、言語の教育に凝集される問題点を次のように指摘している。この家庭の教育への学校の教育の対置の意味するところは、言語の教育において際立ったものになる。その一つは、「リテラシーと道徳教育とは不離一体のもの」として扱われたことである。すなわち、読み書き能力は「宗教と道徳的義務を教える手段」であり、読み書き能力を育てる教育は「道徳教育に従属する位置にとどまっていた」のである。もう一つは、19世紀に入ると教授法改革の試みが展開されるが、この「19世紀前半に発達した読み書き能力を

教える方法は、家庭内カリキュラムを、教育の入り口のところで排除するという性格をもっていた」ことである。すなわち、その教育は「オーラル言語を剥ぎ取り」、それを「標準英語」に置き換えることを基本とするものだったのである。ところで、「標準英語」とは1750年代半ばにまとめられたサミュエル・ジョンソンの辞書に代表されるものであって、ロンドンの商人階級の言語を下敷きにしつつ、綴りと発音と意味とを整序し体系づけたものであった。これと相前後する時期に拡大し始めたパブリック・スクールの教育は、はじめから、この言語秩序との親和性が高いものだったことは改めて言うまでもなかろう。「標準英語」は支配階級の単一言語コミュニティとしての結びつきを強める働きをするものとなった。民衆教育としての読み書き教育は、この言語秩序を下層民衆に及ぼす好機会とされたのである。この教育との出会いは、民衆の子どもたちにとってどのような意味をもっていたのだろうか。ヴィンセントは次のように言う。「読み書きの授業は、子どもの言語能力を拡大することよりも、むしろ、すでに獲得されていたものを消滅させることを求めた。今や生徒たちは、非識字であるというだけでなく、適切にしゃべることさえできないということを感じ知らされた。より大きな単位の部分として言葉を考えるという自然の傾向は、言葉を孤立した存在として扱うアプローチにとって代られた。子どもたちは耳慣れない語彙や、エイリアン的な流儀で発音することを期待される見覚えのない綴りに向き合わされた。生徒を自らの属する言語コミュニティから遠ざけるように教えることが期待される教師たちには、語彙も構造もまったく地域の言葉とは違う言葉で書かれた教科書が与えられた。この時代に初等学校を通過した人々にとって、リテラシーとの出会いは不思議で不気味な経験だったのである」と<sup>(62)</sup>。

読むこと、書くことという、もっとも初歩的・基礎的な教育の段階で、子どもたちは早くも、自分たちの周囲のオーラル言語の世界とは異質な言語世界に引き込まれることになる。民衆の子どもたちにとって、このような言語教育との出会いは、ヴィンセントが指摘するように、教育の経験に

おけるもっとも衝撃的な出来事であったはずである。ただし、管見の限りでは、それ以前に自分たちが目にし、耳にしてきた綴りや発音とは異なる言葉との出会いについて記述した自叙伝は少ないだけでなく、その衝撃について語るものはさらに少ないように思われる。たとえばアレキサンダー・サマヴィルは、その経験を次のように述べている。前述の通り、彼ははじめ、農場を自営する農民等、地域の有力者の子弟も通う私営の週日普通学校に入学する。「私の教育は2ペンスのスペリング・ブックを入手することによってはじまった。最初の6週間は、父母が名づけたように文字を名づけることを忘れるための学習に費やされた。いったんうまくいくと、私はかなり速く進歩した」という<sup>(63)</sup>。サマヴィルにとって、読み書き教育に関する最初の経験は強い驚きや違和感をもたらしたものというより、むしろ自分の適応力の高さを自負すべきものとして記憶されているのである。このように、言語教育の最初の試練に関する記述の少なさに加え、一般的傾向として、その教育に対する抵抗感もそれほど強くなかったと見ることができる。その問題には、当時の民衆にとって読み書き能力の獲得を独自の課業として受けとめるほかなかった事情が反映しているように思われる。すなわち、文字文化の世界に接近するためには、その教育によって与えられるものを否応なく受け入れ、その習得をめざさなければならぬものとして広く了解されていたということなのであろう。ただし、その際、民衆の親たちにとって学校を選択することが可能であれば、私営のおばさん学校や週日普通学校を選んでいる場合が少なくなかったことにも注目する必要がある。「親たちの戦略には論理がある」とするヴィンセントの指摘のとおり<sup>(64)</sup>、地域に密着し、同一コミュニティ内の人間が教師になっていたそれらの学校に通学させるという選択の中に、言葉の問題をはじめとする学校教育で経験する落差を緩和・縮小しようとする親たちの志向を読みとっておきたい。

前述のように、民衆基礎教育がオーラル言語の剥ぎ取りと「標準英語」への置き換えを企図したものであったとしても、その教育によって民衆の

生活に根づいた地域訛り，下町（下層民衆）訛りの言葉が一掃されたわけではない。民衆教育の普及をもって，すべての人々の支配的言語コミュニティへの包摂はもちろん，支配的文化への同化ないし馴化が進んだと判断することは，事柄の一面だけを見ることになるだろう。子どもたちを学校に通わせるとしても，その教育を道具として相対視するとともに<sup>(65)</sup>，それを批判的に捉える力をもつ人々がいたことにも注目しておきたい。まず，1856年生まれのアルフレッド・アイアサンの証言を聞こう。彼はある時，鳥の巣をとるために友人たちと学校を抜け出す。怒った校長から，彼は鞭打ち，棒打ちの処罰を受けひどい怪我を負うことになる。当時，体罰は一般的に是認されていたのだが，彼の両親はそれが度を越えたものと判断したのだろう。それを知るとすぐに母親は，その国民協会系の「教会学校」の校長に抗議するが相手にされなかった。そこで父親が教区牧師のところに彼を連れて行き，傷ついた体を見せて抗議する。牧師も遺憾に思い，医師に診察させる。警察裁判所への訴訟手続きに移るところで，校長から謝罪と補償がなされることになったという<sup>(66)</sup>。

もう一人，ジョセフ・アーチの証言も聞いておこう。今度は彼の親としての経験である。子どもたちに「人生の良いスタートを切らせる」ためには「良い教育を与える」ことが必要だと考え，それゆえ「私は子どもたちのスクーリングに関していくつかの大きな闘いをたたかった」として，彼は次のようなエピソードを記述している<sup>(67)</sup>。ある時，道具購入の必要があったので，二番目の娘を連れてウォーリックの町に出かけたが，娘が白いビーズの飾りのついたヘアネットを欲しがり，それを買ってやった。9歳の娘はうれしくてそれを髪につけて学校へ行ったところ，たまたまやってきた教区牧師の妻が見つかり，ヘアネットの着用を許さなかった。商人の子どもが靴にバックルをつけたり，帽子に花飾りをつけたりしてもなんら問題にしないにもかかわらず，貧しい労働者の子どもの場合には，従わなければそれを取りあげ叱責するという。彼は，それが学校のルールではないことを校長に確認し，牧師夫人の恣意的な対応に抗議し，それを撤回させてい

る。もう一つ、彼は子どもたちが教区学校に入学する際の慣行を変更させている。当時彼の住んでいる地域では、学校への入学手続きに先立って、男子の場合には父親が教区牧師に頼んでチケットをもらうことが必要であった。同様に女子の入学許可を得るためには、母親が教区牧師の妻のところに行かねばならなかったのである。この「法的根拠のない」「悪いシステム」についても、彼はその変更を求めて「闘った」という。これらの「闘い」は彼にとって、自分自身と子供たちの「権利」のためのものであり、「自由と独立を守るため」のものであったと述べている<sup>(68)</sup>。

本稿で取りあげてきた自叙伝から推量されることは、子どもの通学する学校を選び、その教育を限定的・批判的に利用しようとする姿勢をもつ人々が、かなり長い期間にわたって、相当広く存在していたことである。ただ、このアーチの証言のように、たとえ教区牧師夫妻が教区学校の設置母体たる教会の権威を乱用することがあったとしても、それに正面から対決するということは数少ない事例だったといえるだろう。しかし、いずれにしろ、かなり多くの人々が子どもの教育に関して、それをすべて学校の教育に委ねることで事足りるものとは考えていなかったこと、そして、学校の教育に対して可能な限り主体的姿勢を保持しようとしつづけていたことに注目しておきたい。

ところで、民衆を対象とする教育の普及は、ここに見てきたような人々のさまざまな対応を含みつつも、民衆独自の文化との間で大きな軋轢を伴いながら進行してきたことは間違いあるまい。とくにその軋轢は、上級学校への進学をめぐる問題に集中的に表現されているように思われる。この文化的軋轢や民衆文化の変容という視点から、民衆教育の普及過程に関する分析を深めることは興味深い研究テーマになるだろう。次回は、上級学校への進学にともなう諸問題や、大学教育の経験の仕方にかかわる証言に焦点を当てることを予定しており、その作業の中でこれらの論点・課題に関する討論を引き継ぎ発展させたいと考える。

## 注

- (1) 齊藤新治「18世紀における貧民教育への二つの対応——宗教教育と産業教授について」梅根悟監修『世界教育史体系8 イギリス教育史Ⅱ』講談社、1974年。
- (2) Charles Shaw, *When I Was a Child*, Caliban Books, 1977 (First published, 1903), p.9.
- (3) *Ibid.*, pp.4-6.
- (4) *Ibid.*, pp.7-9.
- (5) Joseph Arch, *Joseph Arch, the Story of His Life, told by Himself*, edited with a preface by The Countess of Warwick, Hutchinson & Co., 1898.
- (6) *Ibid.*, pp.26-27.
- (7) 松塚俊三「民衆文化としての初等教育——19世紀イギリスのおばさん学校」長谷川博隆編『権力・知・日常——ヨーロッパ史の現場へ』名古屋大学出版会、1991年。
- (8) J. Arch, *op. cit.*, pp.24-26.
- (9) Francis Place, *The Autobiography of Francis Place*, edited with an Introduction and Notes by Mary Thale, Cambridge University Press, 1972.
- (10) *Ibid.*, pp.56-57.
- (11) Samuel Bamford, *Bamford's Passages in the Life of a Radical and Early Days*, Edited with an Introduction by Henry Dunckly, Volume 1, T. Fisher Unwin, 1893.
- (12) Thomas Cooper, *The Life of Thomas Cooper*, with an Introduction by John Saville, Leicester University Press, 1971 (First published 1872).
- (13) Alexander Somerville, *The Autobiography of a Working Man*, edited with an Introduction by John Carswell, Turnstile Press, 1951 (First published 1848).
- (14) *Ibid.*, p.27.
- (15) Thomas Wood, *From The Autobiography of Thomas Wood 1822-1880* (privately published, 1956), in John Burnett, edited and introduced, *Useful Toil, Autobiographies of Working People from the 1820's to 1920's*, Routledge, 1994 (First published by Allen Lane, 1974).
- (16) Frederick Hobley, the autobiography of Frederick Hobley written at the special request of his children (October 1905), in John Burnett, edited and introduced, *Destiny Obscure, Autobiographies of Childhood, Education and Family from the 1820's to 1920's*, Allen Lane, 1982.
- (17) John Wilson, *Memories of a Labour Leader : The Autobiography of John*

Wilson, Caliban Books, 1980 (First published, 1910).

- (18) 松塚・前掲論文 177 頁。
- (19) 佐伯正一「産業革命期の教育問題」梅根悟監修『世界教育史体系 7 イギリス教育史 I』講談社, 1974 年, 215 頁。
- (20) 松塚俊三「イギリス初等教育の歴史的構造——19 世紀ニューカースルの公教育学校とプライベート・スクール (下)」『福岡大学人文論叢』第 24 巻第 2 号, 1992 年。
- (21) J. Arch, op. cit., p.24.
- (22) Daisy Cowper, 'de nobis' in J. Burnett (ed.), *Destiny Obscure*, op. cit., p.201.
- (23) F. Place, op. cit., pp.40-42
- (24) Ibid., p.43.
- (25) Ibid., p.44.
- (26) Thomas R. Flintoff, *Friday the Thirteenth of May*, TS (type-script) (2-283), Brunel University Library, pp.2-3.
- (27) William George Elliott, *An Octogenarian's Personal Life Story*, TS (1-228), Brunel University Library, p.3.
- (28) D. Cowper, in *Destiny Obscure*, op. cit., pp.200-203.
- (29) Winifred Relph, *Through Rough Ways*, TS (2-657), Brunel University Library.
- (30) A. Somerville, op. cit., pp.19-20.
- (31) Ibid., pp.24-25.
- (32) T. Flintoff, op. cit., p.5.
- (33) F. Place, op. cit., p.42.
- (34) A. Somerville, op. cit., 14.
- (35) F. Place, op. cit., pp.41-42.
- (36) David Vincent, *Literacy and Popular Culture, England 1750-1914*, Cambridge University Press, paperback edition, 1993, p.56.
- (37) T. Cooper, op. cit., pp.39-41.
- (38) T. Flintoff, op. cit., pp.15-18.
- (39) W. Relph, op. cit..
- (40) W. Elliott, op. cit., p.8.
- (41) 「中等教育無料枠を得て小学校から進学する子どもの確率は, 1914 年においてさえ, 約 40 分の 1 にすぎなかった。」J. Burnett, Introduction, in *Destiny Obscure*, op. cit., p.161.
- (42) Bessie Wallis, *Yesterday*, in *Destiny Obscure*, op. cit., p306.



- (43) Edith A. Williams, Untitled, TS (2-832), Brunel University Library.
- (44) Ibid., pp.5-7.
- (45) C. Shaw, op. cit., pp.20-21.
- (46) F. Place, op. cit., pp.59-62.
- (47) J. Wilson, op. cit., p.49, p.61.
- (48) W. Relph, op. cit., p.34.
- (49) J. Arch, op. cit., p.6, p.8.
- (50) Ibid., pp.8-9.
- (51) Ibid., pp.23-24.
- (52) Ibid., p.27.
- (53) A. Somerville, op. cit., p.18.
- (54) T. Wood, in Useful Toil, op. cit., p.313.
- (55) T. Cooper, op. cit., pp.55-65.
- (56) Ibid., p.60.
- (57) Ibid., pp.72-76.
- (58) S. Bamford, op. cit., p.89.
- (59) Ibid., pp.88-89.
- (60) T. Cooper, op. cit., p.41.
- (61) D. Vincent, op. cit. pp.73-92.
- (62) Ibid., p.82.
- (63) A. Somerville, op. cit., p.14.
- (64) D. Vincent, op. cit., p.71.
- (65) Ibid., p.87. ヴィンセントは、「貧民は学校選択においてもっぱらその学校が良い読み書き算教育を提供するかどうかを見ている、とする視察官の証言を引きつつ、親たちは制度化された教育に対していつも道具的アプローチを採用していた」と指摘している。
- (66) Alfred Ireson, reminiscences, in Destiny Obscure, op. cit., pp.85-86.
- (67) J. Arch, op. cit., pp.50-52.
- (68) Ibid., p.50, p.54.